

一八五八年の春先のある日、サンフランシスコ港に一隻の大型船が入ってきた。ハドソン湾会社の「オッター号」である。船には、ハドソン湾会社が北方の猟師や鉱山師から集めた金八百オンス（およそ二十五キログラム）が積まれていた。

話はパツと町中に広がった。フレージャー川に行けば、金がとれる——。その夜のうちに、たくさん男たちが、ニュー・カレドニア（現在のブリティッシュ・コロンビア）の小さな港町（人口二百人あまり）だったビクトリアをめざして出かけていった。それぞれツルハシと選鉱用のナベをもって。

## ブリティッシュ・コロンビアの誕生(上)

# ゴールドラッシュに三万人

ビクトリアへやって来た人々の数は、夏までに三万近くに達した。

そして彼らは、休む間もなく、蒸気船で、あるいはカナヌーやイカダで、フレージャー川を上っていった。

フレージャー川の砂洲では、選鉱ナベで土砂を洗う姿が方々で見られるようになった。あちこちで砂金が採れた。鉱脈もいくつか発見された。それとともに、人々が移動し、町ができていった。ウイリアムズ・クリークで鉱脈が発見されたときは、米国だけでなく、東部カナダ、オーストラリア、英国などからも、一獲千金を夢見る何千という人々が、フレージャー川流域に押し寄せた。

それとしてついに一八六〇年、ビリー・

パーカーという元船員が、カリブー川の岸辺で大きな鉱脈にぶつかった。まもなく、鉱山師のジョン・キャメロンも、同じカリブー川で有望な金脈を発見した。大量の金が、やはりあったのだ——。

大鉱脈が見つかったウイリアムズ・クリーク一帯には、一夜にして何千もの人々が押しかけ、またたくまに

カービル、キャメロンタウン、リッチフィールドといった名前の町が、谷間に出現した。

こうした人口の流入——特に米国からの流入——は、当時カナダを領有していた英国の不安をかきたてた。すでに英国領北アメリカ（カナダ）と米国の西部から太平洋沿岸にいたる国境線は、北緯四十九度線と定められていたものの、英国の統治は、実際にはニュー・カレドニア一帯までは及んでいなかったのである。

もともとインディア人が住んでいた一帯がヨーロッパで知られるようになったのは、キャプテン・クックが今日のバンクーバー島の入江で船を修理した一七七八年以降のことである。クックはそこで自分のもっていた品物をインディアンのラッコの毛皮と交換する。その毛皮は、中国で高値で売れた。

それが評判になって、まもなく米国をはじめ、世界各国から交易船が毛皮を求めてカナダの太平洋沿岸にやってくるようになった。

一七九三年には、モントリオールを本拠とする毛皮会社ノースウエスト・カンパニーに雇われたアレキサンダー・マッケンジーが、ロッキー山脈を越えて白人としては初めてカナダの太平洋沿岸に達し、同じ頃に英国政府が派遣したジョージ・バンクーバー海軍大佐は、太平洋沿岸をくまなく調査して詳しい地図を書いている。



その後、

ノースウエスト・

カンパニーは、ロッ

キー山脈以西にも交易

所や砦を築いて、地域の

インディア人と毛皮の取り引

きを始めた。そして一八二一年、

ノースウエスト・カンパニーがハドソ

ン湾会社と合併すると、ハドソン湾会

社のシンプソン総裁は、自ら太平洋沿

岸を訪れて、カリフォルニア（スベ

イ

ン領）からアラスカ（ロシア領）に

いたるロッキー山脈以西の広大な一帯の

毛皮貿易を独占しようと、砦や交易所

を増設する。

一八四九年、英国はそれまでハドソ

ン湾会社の支配にまかせていたバンク

ーバー島を王領植民地と定め、総督を

派遣する。しかし、事実上の支配者で

あったハドソン湾会社は植民よりも毛

皮貿易を重視し、七年後の一八五六年

になっても、植民者は四百人に満たな

かった。そのほかには、ハドソン湾会

社に雇われていたおよそ三百人がいた

だけであった。

このような、ほとんど無人に近い所

に多数のアメリカ人がなだれ込んで来

たのだから、英国が不安を抱いたのは、

無理からぬことであった。(Y)